

臨床医としての知識人

——Foucaultの立脚点について——

太田 省一

Michel Foucaultの記述について論じようとするとき、二つの観点から考えてみるのが可能だろう。一つには、彼の個々の記述が与えてくれる近代社会についての見通しを把握し、それを発展させていくという観点がある。そしてもう一つには、彼の記述のすすめ方を、知識人の役割・作業という側面から明らかにしていくという観点がある。本稿は、これらのうちの後者の方を主題とした試論である。この“知識人の戦略”という観点は、前者の観点を補足する一方で、独自に追究される価値のあるものである。以下では、言説と可視的なものという二つの領域の間の連関を、特定領域の知識人という彼の知識人像と対照させながら、彼の記述を検討してみたい。

§ 序

本稿は、Michel Foucaultの思考様態を、知識人という側面から把握しようとする試みである。⁽¹⁾ここで“思考”という概念は、きわめて重要である。その理由は、それが根本的に物質性の次元に依存していることにかかわっている。思考の空間は、言説と可視的なものという二つの領域の相互交渉からなっているが、各々の領域毎にあるいはそれらが複合したかたちにおいて、物質的な意義を担うある種の機能が、彼の思考の独自の様相を示すものとして働いているのである。それは、彼が知識人として企てる“抵抗”に固有の意味合いを持たせることになるだろう。

だが、知識人という観点を採用することの利点は、次のことにもある。すなわち、その観点によって、西洋の思考の歴史の一般的文脈のなかに、彼の思考を位置づけることが比較的容易になるだろうということである。逆に言うと、彼の思考の独自性とみえるものは、ある近代社会の解釈を前提条件にしている。その解釈の特

徴は、既成の解釈と同じ素材に準拠しながらも、得られる見通しにおいて異なるという点にある。

§ 1 “特定領域の知識人” 再考

【1】 知識人ということを行論の軸にしようとするときに念頭に浮かぶのは、Foucaultが、ある時期、対談・インタビューを中心にしてよく言及した「特定領域のspécifique知識人」という考えである。そこでまず、それがはらむところの意味を探ることから始めよう。⁽²⁾

それは、「普遍的なuniversel知識人」との対比において定義される。⁽³⁾まず一つには、その対比は、歴史的経緯のなかに位置づけることができる。「普遍的知識人」とは、かつてのマルクス主義の考え方などにみられるもので、普遍的なものの保持ということをめぐる知識人の立場である。そこでは、無意識ではあるが、その即自的保持者である集団としての大衆あるいはプロレタリアを、その対自的保持者である個体としての知識人が導くという構図が存在する。それ

は、すべての人間に当てはまる正義とか真理の名において、集団を先導する知識人のかたちである。

それに対し、Foucault は、知識人にこのような役割を要求しなくなって久しい、と指摘する⁽⁴⁾。知識人は、いまでは、仕事や生活の条件から自分の位置する特定の地点（住居、病院、精神病院、研究所、大学、家族・性関係）で仕事をやる習慣を身につけた。それによって、彼らは闘争についてのより具体的で直接的な認識を獲得した。それは、知識人が、特定領域の問題、すなわち「非普遍的な問題」に直面したということである。ただし、ここで、特定領域の問題とプロレタリアあるいは大衆の問題は、二つの理由から本当の意味で接近するようになる。なぜなら、そこでは現実的・物質的・日常的闘争が問題であり、さらにそこでは、闘争のかたちこそ異なるが、プロレタリアあるいは大衆と同じ敵を対象としているからである。

次に、この対比を類型としてとらえてみることもできる。それは、普遍的真理をめぐる闘う「法律家—名望家」に対し、特定の局所的な科学的真理の名のもとに闘う「学者—専門家」という歴史的原型を持っている。両者をわかち特徴の一つは、前者が書くことにおいて同定されるのに対し、後者はそうではない、という点である。前者は、自己が保持する普遍的価値を著述によって自由な立場から表現する。すなわち、書くことは、知識人を聖化する特性である。その結果、国家あるいは資本に奉仕するとされる有能な専門家たちは、知識人の範疇からは脱落してしまう。

だが、特定領域での活動が出発点にあるとすれば、書くことの聖なる徴としての機能は消滅し、各特定領域で仕事に携わる専門家たちが知識人の役割を担うことになる。その結果、諸地

点の横のつながりというかたちが、知識人の政治化の形態として生みだされるだろう。そのとき、社会全体を導く特権的人間としての作家という像は消えゆく傾向にあるとしても、かわって大学教授あるいはその場所としての大学が、知のつながりにとっての格好の交差点として現れてくる。

Foucault は、このようにして、「特定領域の知識人」が重要性を増してきた趨勢を、いわば図式的に語るのだが、そこで重要なのは、その状況に指摘できる一定の危険の存在である。それを彼は幾つか具体的に掲げているが、結局それらに共通するのは、知識人の活動が、各々の専門的文脈に拘束されて、他とのつながりを失って閉じ込められてしまうという事態である（[1977a=1984:93]）。つまり、それは、個別問題と全体の問題とが切り離されてしまうという危険である。

【2】 そこでそのような危険に対処するために、特定領域の知識人について考え直すことが必要になる。Foucault によれば、その際の考え方の基本となるのは、「科学／イデオロギー」ではなく、「真理／権力」の関係である。真理は、権力作用とともにあるのであって、その外部にも、それなしにもありえない。というのも、ここで言われる真理とは、“われわれが真と偽を見分け、真なるものに特定の権力作用を付与するときに使う、もろもろの定規の総体”を意味するからである。むろん真理は、政治・経済的次元などのさまざまな次元に条件づけられてもいるが、逆に自ら権力と化し、権力を行使用することにもなる。要するに、知は、社会的現実を単に覆い隠すものではなく、まずそのものとして積極的に把握し直されなければならない。真理と権力とは、相互に誘発し、支え合う

という意味で、相互規定的なのである。このことを、Foucault は、各社会に固有の“真理体制”という言葉で表現する。

結局、このような真理／権力という観点の導入によって、知識人は、三重の特定性、すなわち、彼の階級的位置の特定性、生活と仕事の条件の特定性、そして各社会の真理政策の特定性によって規定される。この整理によって、Foucault は、ただ対比されるにとどまる恐れのある第一と第二の特定性を、再結合したとみることができるだろう。知識人は、大衆を導く少数の人間でもなければ、専門領域での仕事に専念するだけの専門家でもない。すなわち、全体の問題と個別の問題とは、真理体制の問題を軸として配置され直すのである。従って、知識人の課題は、真理を権力システムから解放することではなく、真理が目下のところその内部で機能せざるを得ないでいるヘゲモニー形態（社会的・経済的・文化的）から、真理の権力を引き離すことである。

では、特定領域の知識人とは、真理／権力の政治に関与する専門家と結論してよいのだろうか。

ところが実際、Foucault には、権力という問題設定をもとに分析を展開していたこの時期の規定の後に、倫理という問題設定とともに語られる知識人についての規定が存在する。この規定は、後の検討の課題だが、その場合、知識人は、「自己自身からの離脱」という知識人の倫理を核心に抱きながら作業する存在だとされる。この規定は、一見すると、これまでたどってきた特定領域の知識人の規定とは、まったく異なる視点を含んでいるようにもみえる。だが、簡単にそう受け取ってしまうよりは、むしろ二つの規定の間には、Foucault の一貫した視点もまた認められるのではないかと、いうこ

とを問うてみた方がよいだろう。

そこでまずここでは、特定領域の知識人にとっての問題設定が、いかにして選択されるのか、という点から論をすすめてみよう。すでに述べたように、特定領域の知識人は、各自の地点を横につないでいくことで真理をめぐる政治に関与する。だが、そうした政治化が実現するためには、まず問題設定の共有が認識されていなければならないだろう。そして、その認識を促すのが、Foucault 自身の知識人としての役割だとすれば、彼が選択した狂気、病気、犯罪、性といった特殊な個別問題のそれぞれに共通して作用し、彼の問題選択の作業を触発する要因を探ってみる必要がある。

【3】 その意味で本稿が着目したいのは、Foucault の思考における特異なものへの固執である。この特異なもの的重要性は、言説の領域と可視的なものの領域との交叉する場所に浮上するというその特性にある。特異なものとは、いわば“匿名性の輝き”である。

例えば、「汚名に塗れた人々」という一文は、そのことを簡潔に示している。Foucault がそこで問題にするのは、17世紀末以来、行政での記録装置の発達とともにすすめられる日常性の言説化である。そのような言説の対象となる人々は、実在し、しかも無名の人々でなければならない。そしてそのような人々の生が、権力作用の接触とともに記録されるとき、それは“汚名 infâme”と呼ばれるのである。汚名とは、「あたかも実在しなかったかのような生、それらを根絶するか少なくとも消去することのみを意図した、ある権力との衝突によってしか生き延びはしなかった生、多様な偶然の所産を通してしかわれわれのもとには帰来しなかった生」[1977d=1987:83] である。

この引用からもあきらかなように、そこには逆説的意味がはらまれている。その言説化の場所は、「生が権力と衝突し、これと苦闘し、その力を利用しようとするかまたはその罟から逃れようとする場所」[1977d=1987:82]でもある。言い換えれば、その場所は、権力への“抵抗”の場なのである。抵抗の役割は、Foucaultの権力論において要をなすといってよい。なぜなら、権力関係は、厳密に関係的な性格を持つからである。「権力の関係は、無数の多様な抵抗点との関係においてしか存在し得ない。」[1976=1986:123] 抵抗は、権力関係における他方の排除不可能な項として書き込まれることによって、権力関係の戦略的場を構成する。

ところで、この戦略的場において知識人は、どう関与するのか。知と権力とは、互いに内在し合い、「局所の中核」を構成するが、それはまた変形の母型でもある。つまり、知を所有する者とそうではない無知に閉じ込められている者という図式ではなく、「力関係がその働きそのものによって内包する変更のシエマ」を求める必要がある。この中核あるいはシエマは、全体的戦略に書き込まれてはじめて機能するが、逆にどの戦略も支えとなり拠点となる明確で細かい関係に立脚するのではなければ、総体的効果をもち得ない。すなわち、「可能な戦術の特殊性による戦略の条件づけと、そのような戦術を機能せしめる戦略的覆いによるこれらの条件づけという二重の条件づけ」が想定されなければならない([1976=1986:126-129])。

これらの上にたって、Foucaultは、言説の戦術的多義性を想定する。言説とは、権力と知を結合させるものであり、そしてそれゆえに戦術的機能の多様な、一連の非連続的断片である。従って、権力関係は、件の厳密に関係的な性格のゆえに、錯綜した不安定なひとつの働き＝

ゲームとして現出する。そこでは、「言説は、同時に権力の道具にして作用=結果であるが、しかしまた、障害、支える台、抵抗の点、正反対の戦略のための出発点でもあるのだ。」[1976=1986:129-131]

要するに、ここでFoucaultは、“汚名”に見出した言説の権力への抵抗としての性格を、理論的な仮説というかたちで述べているといえるだろう。そこでの知識人は、“同じ歴史的素材をもとにしての読みかえの能力”を要請される。⁽⁵⁾

【4】 だが、その読みかえの素材が素材として現前するのは、いかにしてなのか。ここで問題は、可視的なものの領域にかかわってくる。つまり、“汚名”を現在のわれわれのもとに届くようにするのは、権力との接触という「他所から来る光」であり、それとともに、言説は、「わずかな光輝と短い閃光」とを与えられた「微粒子」と化しているのである([1977d=1987:81])。

言説が、このように“微粒子”と呼ばれる理由は、それが実在すると同時に匿名の人々の記録であるということにある。言説の対象は、実際に営まれた日常の生ではあるが、権力との接触がなければ、実在しなかったものとして忘れ去られたであろうような生である。そこでは、生は、確かに存在するが、容易には見つけにくい粒子状のものである。

これは、西洋近代の知にとって新たに言説の広大な可能性が開かれること、裏返して言えば、言説化にとっての新たな拘束が形成されることを意味する。Foucaultは、その例として「西洋の文学的言説に内在する、倫理学」を挙げる。それは、「最も知覚し難く、最も秘められていて、最も言いにくく示しにくいことを、究

極的には最も禁忌され最も破廉恥なことを、追求していくこと」[1977d=1987:90]である。

ただ、文学は、独自の立場にあって、微細な日常性の言説化という役割から逸脱して、逆に醜聞、侵犯、反逆といった役割を担うことにもなりうる。だが、ここで再び確認されなければならないのは、この文学の独特な位置さえも、「西洋にあって言説の経済と真理の戦略を貫通している、ある権力装置の効果にすぎないということ」[1977d=1987:91]である。

この段階では、二つの点に注目できるだろう。すなわち、文学という言説のかたちを例として、真理／権力という軸に沿いつつ“倫理”という表現がなされていること、そしてまた、その文学が、その二重の機能にもかかわらず、結局権力関係にからめとられているという指摘がなされていること、である。ここで抵抗に関して一種の閉塞感が伴うことは否めないだろう。文学は、この場合、知識人の読みかえ能力を示す代表的事例のはずである。だがそれが、結局は権力装置の効果だとするならば、権力関係を変形の母型に変換することはいかんにして可能なのか。この疑問は、Foucaultに知識人の特定性の再考を促すはずである。つまり、真理／権力の観点から特定性が再編成された場合には、抵抗が権力関係の内部にある、という構図の持ちうる効力を、彼は再測定しなければならない。

§ 2 《他者への関与》

【1】 そこでその再測定をみる前に、まず、Foucaultの思考空間のある断面を、再測定を促した問題点がより明らかになるように整理してみたい。そこで本稿が注目するのは、問題構成の基準としての生—死の関係、および問題構成の形成・変容にかかわる実践の項としての自己

—他者の関係である⁽⁶⁾。

その点から考えて、『臨床医学の誕生』と『レーモン・ルーセル』の比較から入るのが有益であると筆者は考える。この二つの書は、同年の出版であり、その対象の異質さにもかかわらず、可視的なものと言説とのかかわりが主題的に述べられている、という点で、Foucaultの思考の特性を検討する上で都合が良い⁽⁷⁾。

まず、『臨床医学の誕生』では、可視的なものの領域における“不可視な可視性”の可逆的構造が問題になる⁽⁸⁾。これは、臨床関係に解剖的知覚が接続された帰結である。その過程において、Foucaultは、Bichatという医師の果たした役割を重視する。Bichatという人物は、解剖と臨床とを可視的なものへの準拠という共通項を媒介にして結合する。すなわち、彼は病者の身体に病の痕跡を知覚する屍体解剖を臨床診断の根底に組み込むことで、病者の生についての認識の基準を変換する。

従って、“不可視な可視性”は、生と死の関係に密接にかかわる。その際、可視性は、死の可視性と生の可視性とに二重化している。臨床場面においては、屍体解剖で明瞭になる死の可視性は身体が生に覆われて不可視となるが、これは逆に、身体の死んだ表面が病者への医師の臨床的視線を規定する、ということである。こうして臨床の場の基準として包括的に死が機能するとき、生の活動は、常に死との拮抗関係に置かれる。病の症状は、この生対死の闘争の現出であり、その痕跡は、解剖の折に具体的損傷として呈示される。結局、“不可視な可視性”という可視的なものの構造は、臨床の場では不可視のまま機能すると同時に権利上の可視性を保証されている死の表面に帰着する。

臨床医学の歴史的変容は、以上のような知覚上の変容に端を発する。当初、医師の側にあっ

た可視性の表面(分類表)は、死の解剖的知覚が身体に可視化されたことで、個々の病者の側に移行したわけである。その結果、個別の身体空間の内部で起こっている多様な事態こそが知られる価値のあるものとなる。

だが、この変容は、ある意味で危険なものとなる。というも、いったん身体内部への介入を許された医師の検査する視線は、病者の個別性すらも解体してしまいかねないからである。それゆえ、新たな臨床医学の場が維持されるには、医師の視線が日常性の枠内にとどまるといふ条件が必要であり⁽⁹⁾、その条件を実質的に支えるのが、「個人についての言説」である。それは、“眼に見えるものを言うことによって人に見させる”という重要な機能を担う。つまり、言説は、身体内部の眼に見える具体的損傷を精密に記録する能力を獲得することによって、身体空間を、知にとつての特異な場所として維持するのである。その特異さを思考する枠組は、身体の“深さ”として与えられる⁽¹⁰⁾。この深さは、損傷が、臨床では、具体的には見えない点に由来する。ただ、損傷の実在は、解剖的知覚にとつては、確かに予測されるのであり、それゆえ記録技術の洗練は、臨床における診断の枠組を支える効果を持つことになる。

こうして与えられる臨床の場において、医師の作業は、病の普遍的本質を探求することではないし、かといって身体の内部に病の起源を発見することでもない。なぜなら、病とは、隣接する生と死の拮抗関係の表現とも呼ぶべきものであり、それゆえいまや病そのものが、生の活動を基盤として能動化されたかたちで認知されるからである。従って、医師の作業は、病の身体内での活動を記録すなわち反復することである。もし「疾患が分析されるべきものであるならば、それは、それ自体が分析であるがため

ある。観念の上で疾患を解体することは、患者の体内に起こっている解体を、単に医師の意識の中で反復することに過ぎないのである。」[1963a=1969:183]

【2】 このようにみても、『臨床医学の誕生』は、身体空間の捕捉についての歴史研究だという点で、後の権力分析に連なる構図を含んでいるとみなすことができる。なぜなら、ここでいう身体空間は、心的なものや物質的なものという二分法のうちにあるのではなく、生と死の組み合わせられた力関係によって規定されているからである。

その意味でBichatが与えた「生とは死に抵抗する諸機能の総体である」という生の定義は、二つの点できわめて示唆的である。まずこの定義は、身体における生への着目という視点において、『知への意志』の第五章「死に対する権利と生に対する権力」の記述に通じている。そこでは、“生きさせるか死の中へ廃棄する”という表現に示されるように、生存力の強化を主眼としつつ、その裏面に死へ追いやる力を持つ生—権力への近代的転換が語られる。そして、Foucaultによれば、その場合、「問題は身体を一つの分析の中に出現させることである」。すなわち、書かれるべき歴史とは、「身体というものを、それを知覚したやり方とか、それに意味と価値を与えた方法とかを介してのみ取り上げる類の心性の歴史ではなく、[具体的な]身体史であり、[具体的な]身体において最も物質的で、最も生き物であるところに投資してきたそのやり方についての歴史」[1976=1986:191]である⁽¹¹⁾。

またこのBichatの定義は、抵抗から生を了解しようとする点で、Foucaultの権力をみる観点に近い。抵抗から権力をとらえることに付随し

かねない困難さについては、前章の終わりに簡単に触れた。だが、『臨床医学の誕生』を介して“局所の中枢”における関係性の様相を主題的に検討してきた今、それをもう一度改めて考え直してみることができるだろう。

その点で興味深いのは、「主体と権力」という文章である。なぜなら、そこでは、権力関係の経済として、「権力の諸形式に対する抵抗の形態を出発点とする」という提案から始められ、その帰結として“他者”という項に基づいて権力関係の定式化がなされるからである。すなわち、権力は、具体的他者に行使されるものであり、厳密に言えば、「他者の可能な諸行為を構造化する仕方」[1982=1984:246]に他ならない。それは言い換えれば、個人を主体に変形する権力形式である。それは、個人を類別する日常生活に直接関わり、個人の個別性を刻印し、自己同一性を与え、自分にもまた他人からもそれと認められなければならない真理の法を強いる（[1982=1984:238]）。

結局、真理／権力という軸からみると、権力関係において起こっているのは、《他者への関与》として定式化される作用である。そこにおいて知識人は、他者身体の内部に起こる過程を反復することで、個々の身体を差異化する。確かに、ここで日常性、個別性、真理と並んで、自己同一性という要因が掲げられてはいる。しかしこの場合の自己同一性とは、権力形式によって付加的に与えられるものである。それは、他者の身体に対して、主体化の過程における個別化の帰結としてもたらされるものであって、少なくとも他者に先立つものではない。それゆえ、Foucaultは、この文章でも権力関係が内在的にはらむ不安定性あるいは可動性に言及するが、それも前章で述べた範囲内にとどまっている。

【3】では、『レーモン・ルーセル』では、どのようなことが述べられているのか。

『レーモン・ルーセル』においても可視的なものの構成は、中心的な主題となっているが、そこで述べられることは、『臨床医学の誕生』とは微妙に異なっている。『臨床医学の誕生』において可視性は、“不可視な可視性”の構造のうちに二重化されていた。すなわち、そこでは生と死は、対抗的に補完し合うことによって、交替に可視化される。それに対し、『レーモン・ルーセル』では、不可視であることと可視であることとは、同じものの両面である。「可視なるものと不可視なるものとは正確に同じ布地、同じ分離しえない材質であるのだ。」[1963b=1975:139]

この事態をFoucaultは、「同じものの二分化 *dédoublement* 」と表現しているが、この二分化において、死は、事物を見えるようにする影である。ここで死は、権利上可視化されるかどうかを問題にしていない。それは、純粋な機能として対象化されているのである。つまり死は、決して露呈されることのない内部の裂け目である。

そこでFoucaultが強調するのは、この“同じもの”が、端的に欠如 *manque* でもあり、しかも言語の存在はそこに由来する、ということである。それは、言葉の欠乏というきわめて具体的な事実に示されている。すなわち、言葉は、それらが指す事物よりも数少なく、その節約のおかげで何かを意味できるのである。それは、事物を可視化する光明をもたらす欠落である（[1963b=1975:230]）。

要するに、『レーモン・ルーセル』において出発点となっているのは、言語が存在するのは、そもそもいかにしてなのか、という問いだ

ということを念頭に置かなければならない。可視的なものの構成は、ここでは言語と事物の関係性そのものにかかわっている。だから同じものの二分化とは、言語と事物それぞれに固有の領域を分与すると同時に、双方が相互に支え合うことを可能にしているものなのである（〔1963b=1975:167〕）。

こうした二分化の複雑な働きは、『レーモン・ルーセル』でも積極的に言及される分身の問題と密接に関係している。分身の問題とは、いわば可視性の二重性をめぐる問題である。それは、その二重性を前提に思考するのでも、性急に解消しようとするのでもなく、二重性を維持するための根幹をなす二分化の働きを把握することを目指す。

この問題は、『言葉と物』の第九章「人間とその分身」で一般的に展開される。そこでは、二分化の機能としての<他者>が、その現出の場としての<同一者>の分身であるとされる。近代的思考の課題は、この<他者>が、いかにして<同一者>と最も近接したものでありながらも、それから隔てられているのか、ということを示すことである（〔1966=1974:361〕）。

さらにFoucaultは、そのような思考の作業を反復としてとらえる。『レーモン・ルーセル』での表現を借りれば、それは“言語の言語自身を相手とした反復”である。いまそれを、『臨床医学の誕生』において、医師の役割として与えられた反復と対比してみよう。まず両者は、言語の起源や本質を問題としない点で、同一の場に収まるものである。だが、何を反復の対象とするかについては、両者は異なる。医師による病の反復は、身体における二重の可視性の働きを言語を使って転写することを目的とするものなのに対し、言語の言語自身を相手とした反復は、二分化という言葉と事物の関係、すなわ

ち二重の可視性の働く様相を問題化するものである。要するに、後者は、前者における権力関係を現出させるものである。

そして、この二つの反復が、他者と<他者>という他者性の問題としてたてられていることは注目されるべきである。これは、本稿にとって二つの意味を持つ。まず一つは、同一の場をもとにして行われる反復が、全く異なる視野を導くということがある。そしてそこに、Foucaultが知識人として行う作業の一貫性を示す鍵があると考えられる。だが、危険なのは、それが、死あるいは<他者>という欠如について語るという筋立てを持ちうることである。第二の意味は、そのことに関連する。つまり、『他者への関与』という状況では、自己は、空白の場所に形式的に与えられた名に過ぎず、従って、自己という項は、付加的価値しか持たないようにみえる、ということである。

この二つのことのうちに、再測定 of 足場と問題点とが示されているだろう。以下では、このことを念頭に置いて、知識人の抵抗が持ちうる効力の再測定という先の問題にもどってみよう。

§3 現在性への問い

【1】 知識人の活動する場は、常に、言説の領域と可視的なものの領域とが、相対的には独立しながらも相互に規定あるいは干渉し合う場である。つまり、書くことが敷居としての聖なる効力を喪失した状況においては、知識人にとって、見ることもまた書くことと不可分な仕事として重要な意義を帯びる。その際、知識人が可視的なものの領域に関与するときの技術は、光学的配慮に基づくものである。その配慮は、権力関係の表現である身体を対象とする。それは、すでにみたように、身体の知覚や意味

付与の問題ではなく、身体における生命を帯びた物質性を、個人の諸能力の増幅に向けていかに活用するかという問題にかかわっている。結局、可視性とは、身体空間が可視化される際のこの“生きた物質性”，言い換えれば光学的秩序において光を受ける表面である。

そのとき、知識人にとって、見ることには二つの型がある。一つは、権力関係に内属する場合である。その場合、知識人は、個体へと介入し、その個別特性を識別することで、個々人の諸能力を測定するための素地を与える。その例としては、(完全にそれに合致するとはいえないが)⁽¹²⁾『監獄の誕生』における一望監視装置を挙げることができるだろう。それは、「光をあてる」ことによって服従させる方式を編み出す([1977b=1978:163])。すなわち、そこで行使される権力は、ある人格の中ではなく、身体・表面・光・視線などの慎重な配置の中に存している([1975=1977:204])。

もう一つは、Foucaultが、特定領域の知識人に戦略的に要求する型のものである。それは、すでにみたように、可視的なものと不可視的なものと、実は同じものであるにもかかわらず、違うものとして思考されている事態の対象化である。「(・・) 哲学者は、<見えないもの>を見えるようにするのではなく、<見えているもの>を見えるようにする役割を持っていると思います。つまり、常に人が見ていながらその実態において見えていないもの、あるいは見損なっているものを、ちょっと視点をずらすことによってはっきりと見えるようにすることなのです。」(Foucault & 渡辺 [1978=1978:59])

つまり、Foucaultにとって、見ることは、同じ場でのわずかな視点の移動と相関する。このことは、彼のBichatに対する関心を説明してくれるだろう。Bichatの視点は、臨床医学に解剖

的知覚をもたらしたとはいえ、表面に準拠するという点で、一貫して臨床医のものである。彼は、身体を徹底して身体の側にしかない可視性によって根拠づけたのである。逆に、Bichat以後の臨床医は、身体内部に局在する損傷を可視性に優先させたのであって、それは表面にではなく、深さに準拠することである⁽¹³⁾。Bichatは、わずかな視点の移動によって、現前する可視性が、死の白い可視性と二重写しになっていることをとらえたのである([1963a=1969:178])。

従って、戦略的に見ることは、権力関係に内属する場合の見ることそのものを可視化することだとひとまずは言えるだろう⁽¹⁴⁾。それは一見権力関係の場を視野に入れる超越的視点に立つことのように見える。だが果たしてそうなのか。この問いに対しては、ここで精確な答えを与えることはできない。なぜなら、いままでみてきたように、知識人は、言説の領域と組合わさったかたちで可視的なものの領域に関与するからである。書くことの聖性の喪失は、そのままその価値の喪失を意味しない。書くことは、先の表現を借りれば、「知の交差点」を形成する機能を担うのである。それは、いわば問題構成の可視化であるが、その作業がFoucaultにとって歴史という様態をとる限り、問題構成の素材をなすのは言説の編成なのである。そこで、彼が言説の領域でいかに関与するかについて考えてみよう。

【2】 Foucaultは、言説分析において、“言表 énoncé” という概念に固有の位置づけを与えている。それは、言説の最小単位ではなく、一個の機能である。すなわち、「言表は、その特異な存在様態において、文、命題、言語行為があるか否かを言いうるために不可欠な」[1969a=1981:131] 機能である。それは、機能であるが

ゆえに、命題・文・言語行為とは区別されるが、それらと別の形をとるわけでもない。「言表は、可視的でないと同時に隠されてもいない」[1969a=1981:166]という表現は、その事態を端的に示している。

まず、隠されていない、というのは、言表は、実際に産み出された諸記号の総体にかかわっており、言表分析とは、言われたこと、まさしくそれがかつて言われたという限りでの記述にしか基づきえないからである。従って、潜在的言表というものは認められない（[1969a=1981:166-167]）。だが、他方で、言表は、可視的なわけでもない。第一に、それは、文や命題などが与えられているという事実そのものにかかわるからである。すなわち、言表は、 $\langle \cdot \cdot \rangle$ がある $il\ y\ a$ の準不可視性を備えている。次に、言語の能記的構造が、常に他の事物にかかわるとき、言語に特有の実在は消えてしまうようにみえるが、言表の水準に関しては、この実在そのものの考察が必要だからである。そして最後に、言表は、言語についての他のすべての分析の前提になっているからである。言語が分析対象となるためには、常に無限ではなく確定された“言語的所与”が実在しなければならない（[1969a=1981:168-170]）。

このような言表についての指摘は興味深い。なぜなら、それは、言説の領域への見ることの適用を物語っているように思われるからである。例えば、次のような記述を、Bichatの視線が持つ表面への準拠と比較してみればよい。すなわち、「言表の水準は、 $(\cdot \cdot)$ 言語の内的組織よりは周辺を、内容よりは表面を規定する。だが、この言表という表面を記述しうるということは、言語の“所与”がある根源的な沈黙を単に破るということではなく、語、文、意味作用、断定、命題の連鎖などが、沈黙という原初

の間に直接接してはいないということを証明している。」[1969a=1981:171-172] 要するに、このような言語の台座としての言表をとらえるには、「視覚のある種の転換」すなわち“見えてはいるが、見えないもの”を見るための“わずかな視点の移動”が必要なのである。

こうした言表の可視性は、言表に特有の物質性に密接に関係している。

まず、単純な事実として、言表は、何らかの物質的厚みを通じて与えられる。ただしその場合、同一の意味を持つ文も、それが紙片に書かれたものであるか、印刷されたものであるか、会話中に発されたものであるかといったことによって同一の言表を構成しなくなる（[1969a=1981:152-153]）。

だがそこから、物質性が、言語の分析に影響する単なる一要因だということにはならない。むしろ物質性は、言表それ自身を構成する。言表の物質性は、純粋な出来事としての言表行為に規定はされるが、それが有する空間的=時間的局在性には完全には還元されない。というのも、それは、「反復可能な物質性」だからである。例えば、『悪の華』のすべての版において、たとえ活字、インク、紙などの局在化の要素が同一ではなくとも、そこには同一の言表の作用をみななければならない。言い換えると、その反復可能性とは、“再記入と転写の諸可能性”に結びついているのであり、従って言表の物質性は制度的秩序を形成する。同一の秩序に属する言表は、その空間的=時間的規定にかかわらずすべて同一である。つまり、身体における可視性と同じように言表の場合にも、反復とは、起源を欠いたものなのである。それは、消極的にいえば、言表の起源を前提してかかることは無効だということであり、積極的にいえば、言表とは、常にすでに反復だということである。

言表は、そもそも他の言表からなる言説編成の空間に属している。だとすれば、いまみてきた言表の物質性は、言説編成の空間の稀薄さを帰結させることになるだろう。言表は、すでに言われたことの実在である。言い換えれば、言表は、文あるいは命題の考えられうる可能性をつくすものではなく、物質的制度による排除に隣接して現れるものである。それゆえ、空隙、切断などによる欠如を必然的にともなうのが、言表の空間である。

従って、このようにとらえられる言表あるいは言説空間は、ある種の視覚の転換によって可視化されるにいたったとき、特定の権力関係を指し示すことになるだろう。すなわち、言表は、物質性として現出する際、同時に言表が反復され、転写されていく空間を、相関する欠如とともに呈示するのである。⁽¹⁵⁾つまり、言表は、真理／権力を物質的に支えるが、そのように機能するのは、準不可視性のうちにとどまる限りにおいてである。逆に、それは可視性として現れたとき、物質的諸制度の範囲を示すがゆえに、抵抗の拠点として働くのである。

【3】そしてこの言表をめぐる Foucault の抵抗の戦略として、虚構(フィクション)という手段が浮かび上がってくる。「私の本は、単純明解に「フィクション」です。しかし、それを創出したのは私ではない。(…)言表されたものの全体にたいする、われわれの時代とそのエピステーメーの形状との関係性こそが、それを創出したわけです。たしかに、主語は本の全体にわたって現前してはいますが、しかしこの主語は、なんであれ今すべてを語っている匿名の主語 < on > なのです。」[1966, 1967=1987:174]

虚構の創作者が匿名の主語 < on > だと Foucault が言うとき、それは、言表の物質性が

準不可視的に支える特定の真理／権力に対応していると考えられる。そしてそのことからわかるように、虚構は、真理に対立するものではなく、むしろ真理体制に内在する ([1977c=1984:177])。だから虚構は、見ることの言説の領域への適用であり、言表という物質性の可視化である。そう考えるとき、次の発言も理解することができるだろう。「言語が事物から距たっているゆえにフィクションがあるのではない。そうではなくて、言語はそれら事物の距たりなのであり、(…)この距たりの中を進みつつこの距たりを語るようなあらゆる言語は、フィクションの言語なのである。」[1963c=1972→1984:205]

ここでようやく、この章の【1】の終わりで出しておいた問いに答えることができる。すなわち、Foucault において見ることは、言説の領域に適用されて虚構という形態をとる。そして言表という概念をなかだちにして考えるならば、「フィクションと言語のあいだには複雑な所属関係が、支えが、そして異議申し立てがある、というべきである。」[1963c=1972→1984:204] 従って、Foucault にとって見ること＝書くことは、対象にたいして超越的視点からの記述を行うことではない。

もちろん、真理／権力への内在という条件から、虚構の働きは、権力関係の効果でしかないということもありうる。例えば、それは、本稿ですでにみた文学の一つの側面として指摘できる。日常性の記述を虚構というかたちで追求するようになる近代の文学は、権力の作用に忠実であったり、それから逸脱したりもするが、結局は、権力作用の効果にしかすぎない ([1977d=1987:91])。

では、この意味での虚構と、Foucault 自身の記述としてのそれとを区別するものは何なのか。

言い換えると、知識人としてのFoucaultの関与の有効性を保証するものは何なのか。

まずいままでみてきたところをいったん整理してみよう。そこで終始Foucaultは、可視性ということにこだわってきたように見える。この可視性には、権力関係が根づいており、その可視性から権力関係は、生きた物質性を引き出す。この物質性の特徴は、反復可能だということにある。ただし、そこでの反復は、起源を欠いている。言説に関していえば、言表とは、常にすでに反復なのであり、再記入と転写の可能性である。そこに言表を特性とする言説の戦術的多義性、すなわち権力行使の手段でもありうるし、抵抗の手段でもありうるという可能性が生じるのである。すなわち、言表とは、汚名の言説における微粒子のような物質性であるといつてよいだろう。

だが、こうした物質性の表面を可視化する虚構によって抵抗しようとする中で、何が問われているのか。Foucaultは、言表の一般的システムとしてのアルシーヴの分析は、一つの特権的領域を含んでいる、という。それは、「われわれに近接していると同時に、われわれの現下の情勢とは異なるもの、(・・)われわれの現在をとりまき、その上に張り出し、その他者性においてそれを指し示す時間の外縁であり、われわれの外で、われわれを限定しているところのものである。」[1969=1981:201]

ここにすでにふれたFoucaultの出会い困難を読み取ることもおそらく可能である。つまり、言表のシステムの記述がわれわれの現在を明らかにしようとして目標とするのは、他者性、すなわち《他者への関与》の呈示であって、それは結局、現在を欠如として思考するという逆説的結果を招くのではないか、ということである。しかし、むしろここからみてとりたいのは、

Foucaultにとって重要なのは、他者の問題そのものではなく、現在性への問いだということである。つまり、見ること=書くこととしての虚構において一貫しているのは、その実戦の項のいかんにかかわらず、現在性への問いだという点なのである。

【4】 その“現在性”の問題を、Foucaultは、啓蒙の意義をめぐって主題的に展開している。彼は、Kantの論文「啓蒙とは何か」において、18世紀以来現代の思考をとらえている問いである“現在への問い”が初めて発せられたという。もちろん哲学的言説が現在ということ問いの対象としたのは、それが初めてではない。だが、Kantの問いを特徴づけているのは、それが、それについて語っている当の哲学者が属している哲学的出来事としての現在についての問いだという点である。それは、自らの言説の現在性の問題化に他ならない。このように哲学者が現在への自己の帰属を問うことは、教義や伝統への帰属、単なる一般的な人間の共同体への帰属ではなく、ある種の《われわれ》、すなわち自らの現在性によって特徴づけられているような文化的な一総体へと関わる《われわれ》への自己の帰属を問うことである（[1984a=1984:176]）。

また他方で、Foucaultは、Kantが「大革命とは何か」ということについても、現在性への問いという観点から新たに答え直している、とする。というのは、フランス革命もまた哲学的出来事の一つとして、現実の結果そのものを確定しているからである。そこでFoucaultが目するのには、大革命のまわりに、「熱狂へと及ぶ熱望の共感」が存在するということである。重要なのは、「大騒ぎの興奮状態ではなく、スペクタクルとして大革命、そこに参加する者たち

にとっての大変動の原理ではなく、それを見ている者たちにとっての熱狂の源としての大革命」[1984a=1984:182]である。

従って、啓蒙とは、知と無知との二分法を前提にした理性の進歩としてのみ現れるものではない。むしろ強調されなければならないのは、啓蒙が、知の側にある者が自己の属する現在性を問うことだという点である。その現在性は、いまもみたように、出来事としての言説であり、他方で可視化されるべき対象である。そこに見ること＝書くこととしての虚構はかかわる。「虚構の言説は、空間とか時間とかいうものよりも下にある空間」[空間的な網状組織][1963c=1972→1984:204]を可視化する。その空間は、距たりの作用によって事物を現在させると同時に、不確定な時間の配分を規定する。つまり、言表のような種類の物質性を秩序づける働きが、《われわれ》にとっての近さと遠さの感覚を決定するのである。現在性への問いとは、この意味での空間に抵抗することである。

従って、近代性 modernity とは、歴史の一時期というよりも、一つの“態度”だという Foucault の提起もそこから把握しなければならない。ここで態度とは、同時代的なリアリティーへの言及の仕方を意味する。近代という時代を近代以前や近代以降から識別しようとするよりも、近代性の態度が、その形成以来、反近代性の態度といかに闘ってきたかを発見しようとするほうが、より有益であるだろう ([1984g→1986:39])。

そこで Foucault は、Baudelaire を例にとって、⁽¹⁶⁾ こうした哲学的態度としての近代性について三つの特徴を挙げる。まず、それは、現在の契機を持つ“英雄的な”様相をつかむことであり、またそれは、その把握によって、現在を變形するような自由の実践の問題である。だが、

近代性は、現在性へのこうした関係性の一形式であるだけではない。それは、自己自身とともに確立されなければならない関係性の一様式でもある。近代的であるとは、自己自身を複雑で困難な錬成の対象と見なすことである。すなわち、自己自身、自己の秘密、隠れた真理の発見ではなく、自己自身を発明することであり、自己自身を制作することである。Foucault によれば、これらの実践は、社会自体にも、身体政治にも場所を持っていない。それらは、もうひとつの場所、すなわち Baudelaire のいう技術 art の場においてのみ産み出されるのである ([1984g→1986:41-42])。

【5】 ここで現在性の問題をたどるうちに自己の問題が現出することは、注目に値する。なぜなら、そこには、Foucault が知識人の特定性を再測定した際の一貫性と変容とが同時に現れているように思われるからである。一貫した問いというのが現在性への問いであることは言うまでもないが、変化したのは、ここで《他者への関与》に付属する問題としてではなく、固有の問題として自己の問題が立てられていることである。それは、すなわち、『快楽の活用』で研究計画の変更の結果立てられる自己実践の問題である。⁽¹⁷⁾ そこで次のことが問われなければならない。Foucault 自身の語るこの計画変更は、彼の思考の軌跡においてどのように位置づけられるのか。

彼は、あるインタビューで、自らの思考の変化を次のように語っている。『快楽の活用』以前、例えば『狂気の歴史』では、他者の“統治”の問題から出発して、狂人としての自己体験の問題へと向かった。それに対し、『快楽の活用』からは、“自己統御”の問題から、その問題の他者の“統治”との合体の問題へと向か

う。従って、それらは、いかにして自己への関係と他者への関係が結び合わされるような一つの「経験」が形成されるのかという問いへと向かう反対向きの導入路をなす（[1984d=1984:84]）。

この発言が意味するところは二重である。すなわち、『快樂の活用』も、結局はそれ以前と同じ問いのもとにあるということ⁽¹⁸⁾、けれども、それが問われうるには、他者から自己へと導入路を逆にしなければならなかったということである。要するに、現在性と自己との結合は、「自己自身からの離脱」という知識人の倫理によって可能になるのだが、それは、他者から自己へとわずかに視点を移動することなのである。その視点の移動は、すでに触れたように、見えていながら見えないものを見えるようにする。それゆえ、他者から自己への転換にあたって、自己は他者性の次元を含んだうでで可視化されるのである。つまり、自己の発明と自己自身からの離脱とは、『他者への関与』という真理／権力の問題構成に内在することにおいて両立するのである。

その点、近代性の態度が、また「哲学的エートス」とも呼ばれるのは、示唆的である。このエートスは、境界への態度である。といっても、それは、知が越えてはならない限界の確定ではない。逆に、普遍的、必然的なものとして与えられたところに、実は特異なもの、偶然的な諸条件の産物がどんな場所を占めているか、という積極的問いなのである（[1984g→1986:35]）。そうみると、知識人の倫理とは、権力関係の内的越境である。

従って、Foucaultは、自己実践を対象化することで、『他者への関与』という問題構成を放棄したわけではない。自己実践の問題化は、『他者への関与』では準不可視的だった自己を

可視的にしようとすることである。それは、最終的には、特定の関係性から自己の力を引き離すことに他ならない。つまり、そこに賭けられているのは、「いかにして諸能力の成長を権力関係の強化から切断しうるか」[1984g→1986:48]ということなのである。そしてその意味で、自己への関係としての倫理は、やはり力の関係として把握されなければならない。“性”が自己との関連で対象化されるのもその文脈においてなのである。「性行為は、(・・・)主体の倫理的形成にとって特権的な領域を組み立てる。その場合の主体たるや、その特徴として、自らのなかに解き放たれる力を統御し、自分のエネルギーの自由な動きを見張り、自分の性を自分の一時的な生存を越えて存続する一つの営為とする、自分の能力をもたなければならない。」[1984c=1986:175]

結局、Foucaultが、『快樂の活用』の出発点で行ったのは、自己という観点から知識人の特定性を再び編み直すことである。それは、真理／権力の現在において、抵抗に新たな拠点を与えてくれるだろう。すなわち、抵抗は、自己自身からの離脱という視点のわずかな移動によって、自己を現在性の問いの対象とするのである。

§ 結論にかえて～作者一機能の分析

だが、Foucault自身の抵抗は、他者から自己へ視点を移動したとしても、相変わらず虚構という特異な言説実践の形態をとる。Foucaultは、自らも特定領域の知識人であると規定するが、それは、生物学者や物理学者がそうであるのとはまた違った意味合いを持っているように思われる。彼によれば、それらの専門家は、「生と死の戦略家」[1977a=1984:93]である。それは、彼らが生と死のあいだの動態的な関係を認

識し、それに基づいて自分の現在の位置から診断を下しうる、ということである。だが、それが、知識人としての一般的戦略に従っていると
いうのは、虚構という言説実践を通じて現在性への問いを共有している限りでしかない。

では、そのような言説実践の主体としての Foucault を、実際問題としてどう位置づけたらよいのだろうか、最後に「作者とは何か」という文章を参考にしながらそのことにふれておこ⁽¹⁹⁾う。彼は、19世紀ヨーロッパにおいて、「言説実践の導入者」という特異な型の作者が生まれたとする。その最初のかつ最も重要な例は、Marx と Freud である。彼らは、偉大な文学作家、宗教の教本の作者、科学の創始者と混同されてはならない。彼らの大きな貢献は、彼らが自分の作品だけでなく、他の諸テキスト形成の可能性と規則をも生み出したところにある。つまり、彼らは、終わりのない言説の可能性を打ち立てたわけである。それは、文学におけるような影響関係をいうのではない。なぜなら、Marx や Freud は、類似と同程度に差異も可能にしたからである。またそれは、科学の言説で許容される変化とも異なる。科学を創始する行為は、後代の変形と同じ規範上の基礎に立つのに対し、ある言説実践の導入は、後の変形とは異質である。それは、後の展開や変形とは、必然的に切断されている。

これらの特質を前提にするとき、そのような言説実践の導入者にとって、“起源への回帰”が必然性を持つということが理解できる。

まずそれは、“再発見”や“再活性化”とは区別される。再発見とは、過去のある言説にさかのぼって、そこに現在の言説に通じる要素を見出すことであり、また再活性化とは、現在の全く新しい領域に、他の言説を外から刺激として挿し挟むことである。それに対し、“へ

の回帰”は、言説実践の導入を特徴づける特有の運動である。回帰は、偶然や誤解の産物ではない基本的かつ構成的な忘却が存するがゆえに起こる。そのため、回帰の行為は、いずれにせよ逸脱やパロディのもとでありうる。回帰と忘却は、循環する関係にある。つまり、回帰は忘却に由来するが、回帰の目的は、その忘却を解決することなのである。

さらに、回帰は、テキストそれ自身、特にそのテキストの隙間、距たり、不在に記されたものに注意を払った回帰である。従って、この空所への回帰は、言説実践を変形する効果的かつ必然的な手段である。Galileo の作品研究は、われわれの歴史の知識を変えるが、科学のメカニズムは変えないのに対し、Freud や Marx の再検討は、精神分析やマルクス主義の理解を変えるのである。

そして最後にこの回帰は、作者とその作品との謎めいたきずなを強化する。あるテキストは、特定の作者の作品であるがゆえに、導入の価値を有するのであり、われわれの回帰も、その知識によって条件づけられている。従って、回帰は、普通のテキストとその直接の作者とのそれとは同一ではない“根本的”作者と仲介する作者との関係をつくる。

Foucault は、結局、作品の主題や概念の分析だけでなく、言説が社会関係を基礎にして分節化されていくあり方に着目した、言説の歴史的存在様態の分析を、いわばこの“作者—機能”を要として行うよう提起する。従って、起源にある絶対的主体という考えは疑問だが、主体という考え方そのものが完全に放棄されてはならない。それは、再考され、その機能、言説への干渉、依存の体系を把握されなければならない。すなわち、主体は、言説の複雑かつ変移する一機能として分析されなければならない。

こうしてたどってきてもいいのは、Foucault という作者もまた、(そのまま受け入れられるのではないにしても)このような分析の対象たりうるだろう、ということである。⁽²⁰⁾彼は、最終的に自己の技術、すなわち《生存の美学》を基準としつつ、自らを自らによっていかに主体として組み立てていくか、という問題に関心を寄せていった。それは、倫理の問題として立てられているかもしれない。だが、彼にとって、それは、作品としての自己と作者としての自己との関係の問題なのである ([1984b=1984:112]⁽²¹⁾)。

すなわち、作者としての Foucault は、《他者への関与》に内属する自己への抵抗としての自己の作品化をギリシャ道徳への“回帰”によって試みたといえるだろう。⁽²²⁾それは、おそらく、「言説実践の導入者」としての自己への回帰を自分自身で行うという意味で、いまみた型の作者とは異なるような独特の側面を持つ。だが、そのあり方そのものにおいて、彼を、一つの作者一機能として言説の社会的分析のうちに位置づけうることもまた確かなのである。

※ 引用については、筆者の責任において訳文・訳語を変更してある部分があります

註

- (1) 本稿は、Foucault の知識人としての戦略を説明するための準備作業である。従って、図式化する傾向が主になるため、細部については論じ残したことがあるということをあらかじめ断っておく。
- (2) 以下 (§ 1 - 【1】と【2】) の“特定領域の知識人”についての整理は、基本的に [1977a=1984:87-98] に沿っている。他に、[1984f=1984:35-36] を参考にした。

- (3) この例として挙げられるのが、Sartre である。これについては、フランスでのマルクス主義の根強さということも考えてみなければならぬだろう。ただし、そこに彼と Foucault との対立のみをみてもならず、Foucault による Sartre の暗黙の読みかえをみるべきだろう。
- (4) その背景として、Foucault は、テクノロジー、ホワイトカラー、第三次産業などの発展を考えているようである ([1984f=1984:35])。
- (5) [1982=1984:249] を参照。
- (6) “問題構成”とは、「人間存在が自分を思考されうるもの、思考されなければならぬものと見なす手掛り」[1984c=1986:19] であり、“真なるもの”の歴史における分析対象となるものである。
- (7) 『臨床医学の誕生』と『レーモン・ルーセル』を対にして論じたものに、豊崎 [1975] がある。本稿は、それから示唆を得るところが大きい。
- (8) 本節 (§ 2 - 【1】) での『臨床医学の誕生』の要約は、筆者が比較的自由に行ったものなので、完全な引用以外は、特に参照箇所の指示はしない。これは、主として第 6 章以降の要約である。
- (9) このことに関して、Foucault は、当時顕微鏡が使用されなかったことを挙げている。
- (10) 註(13)参照。
- (11) また別の文章での次の記述も参考になるだろう。すなわち、「体 corps」という語で問題になっているのは、「複雑で多様な物質的ことがらであり、諸個人の体ばかりでなく、諸個人の生命を保証し、その行動の枠組や結果を構成し、その移動や交換を可能にする物質的な諸要素の総体が含まれる。」[1979=1984:128]
- (12) Foucault によれば、<一望監視装置>は、視線に重要性を与える点では「古風」であり、権力技術一般に重要性を与える点で非常に近代的

- である ([1977b=1978:168])。
- (13) “深さ”と“表面”との関係については、[1967=1984:71-73]も参照。
- (14) それは、知識人の仕事に本質的な「批判」である。とはいえ、破壊、拒絶、拒否ということではなく、検討ということ、要点はふつうよりどころになっている価値体系を、できる限り宙吊りの状態にしておき、その間にその体系を検査してみるということである ([1984f=1984:35])。
- (15) この欠如は、起源の拒絶ということとともに、解釈の未完成という近代的なありようを示していると Foucault はみる ([1967=1984:73-75])。つまり、彼にとっては、言説をめぐる闘争関係がつねにそこに繰り広げられていることが認識されなければならない。
- (16) 註(21)参照。
- (17) この研究計画の変更を示唆する記述がある。
「私の『知への意志』以前の《行動方針》はこうしたものであった。つまり、狂気とか死とか犯罪とか性現象とかのような経験と各種の権力テクノロジーとのあいだの諸関係の分析である。今後は私の仕事の対象は、個別性の問題——というか、あえて言うなら、《個別化を行う権力》の問題と関連するアイデンティティの問題である。」[1986=1987:57] また、『レーモン・ルーセル』の第五章では、Roussel の記述の分析として、同型の議論が展開される。
- (18) Foucault は、『快楽の活用』を次のように位置づける。「この研究は(…)模索しながらの長期にわたった鍛練の、しかも自らを正し自らを改めることがしばしば必要であった鍛練の手順確認なのである。」[1984c=1986:16-17]
- (19) 以下の要約では、英訳 ([1969b=1977]) を使用した。
- (20) Rabinow [1984→1986:23-27] を参照。
- (21) Ruas [1986:184] も参照のこと。ところで、この指示箇所でも、Baudelaire の名が引き合いに出されており、そのことは注目すべきようにも思われる。特に、『快楽の活用』の序文の註で言及される Benjamin の『ボードレール』論の側面から考察してみるべきかもしれない。
- (22) [1984e=1987:91] 参照。

文献

- Foucault, Michel 1963a *Naissance de la clinic*, PUF.=1969 神谷美恵子訳、『臨床医学の誕生』, みず書房。
- 1963b *Raymond Roussel*, Gallimard.=1975 豊崎光一訳、『レーモン・ルーセル』, 法政大学出版局。
- 1963c “Distance, aspect, origine”, *Critique*. (nobembre).=1972→1984 豊崎光一訳 「距たり・アスペクト・起源」, 『エピステーメー (第二次)』 0号。
- 1966, 1967 “Entretien avec Michel Foucault”, *Les Lettre Francaises*.=1987 福井憲彦訳, 「歴史の書き方——『言葉と物』をめぐって——」, 『アクト』 3。
- 1966 *Les mots et les choses*, Gallimard.=1974 渡辺一民・佐々木明訳, 『言葉と物』, 新潮社。
- 1967 “Nietzsche, Freud, Marx”, *Cahiers du Royaumont, Philosophie* 7.=1984 豊崎光一訳, 「ニーチェ, フロイト, マルクス」, 『エピステーメー (第二次)』 0号。
- 1969a *L'Archéologie du savoir*, Gallimard. =1981 中村雄二郎訳, 『知の考古学』, 河出書房新社。
- 1969b “Qu'est-ce qu'un auteur?”, *Bulletin de la Société Française de la Philosophie*. =1977 Donald F. Bouchard and Sherry Simon tr. “What Is an Author?”, *Language, counter-memory, practice*. Cornell University Press.
- 1975 *Surveiller et punir*, Gallimard.=1977 田村俶訳, 『監獄の誕生』, 新潮社。
- 1976 *La volonté de savoir*, Gallimard.=1986 渡辺守章訳, 『知への意志』, 新潮社。
- 1977a “Vérité et pouvoir”, *L'Arc* 70. =1984 北山晴一訳, 「真理と権力」, 『ミシェル・フーコー』, 新評論。
- 1977b “L'OEil du pouvoir”, *L'Arc* 70. =1978 伊藤晃訳, 「権力の眼——『パノプティック』について——」, 『エピステーメー』, 1978年10月号。
- 1977c “Les Rapports de pouvoir passent à l'intérieur des corps”, *La Quinzaine Littéraire* 247. =1984 山田登世子訳, 「身体をつらぬく権力」, 『ミシェル・フーコー』, 新評論。
- 1977d “La vie des hommes infâmes”, *Les cahiers du chemin* 29. =1987 田中寛一訳, 「汚名に塗れた人々」, 『現代思想』 15-3。
- 1979 “La politique de la santé au 18siècle”, *Les machines à guerir* [Collectif], Burxelles.=1984 福井憲彦訳, 「健康が語る権力」, 『ミシェル・フーコー』, 新評論。
- 1982 “The Subject and Power” (Afterword for *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics*, by H. L. Dreyfus and P. Rabinow), University of Chicago.=1984 瀧美和久訳, 「主体と権力」, 『思想』 718。
- 1984a “Un cours inedit”, *Magazine littéraire* (1984/5). =1984 小林康夫訳, 「カントについての講義」, 『エピステーメー (第二次)』 0号。
- 1984b “Le sexe comme une morale”, *Nouvel Observateur* 628-75. =1984 浜名優美訳, 「ひとつのモラルとしての性」, 『現代思想』 12-12。
- 1984c *L'Usage des plasirs*, Gallimard.=1986 田村俶訳, 『快楽の活用』, 新潮社。

- 1984d “Le souci de vérité”, *Magazine littéraire* 207. =1984 湯浅博雄訳, 「真実への気遣い」
『エピステーメー (第二次)』0号。
- 1984e “Le retour de la morale”, *Les Nouvelles* 628-75. =1987 増田一夫訳, 「道徳の回帰」, 『同
性愛と生存の美学』, 哲学書房。
- 1984f “Du pouvoir”, *L'Express* 713. =1984 桑田禮彰訳, 「権力について」, 『ミシェル・フー
コー』, 新評論。
- 1984g→1986 “What is Enlightenment?”, Catherine Porter tr. *The Foucault Reader*, Penguin.
- 1986 “Omnes et singulatim: Vers une critique de la raison politique”, *Le cahiers du chemin* 2
7. =1987 「全体的かつ個別的に——政治理性批判をめざして——」, 『現代思想』12-12。
- Foucault, Michel & 渡辺守章 1978 「哲学の舞台」, 『世界』1978-7→『哲学の舞台』, 朝日出版社。
- Ruas, Charles 1986 “An Interview with Michel Foucault” (Postcript for *Death and the Labyrinth*, by Michel
Foucault), Univ. of California Berkeley.
- Rabinow, Paul (ed.) 1984→1986 *The Foucault Reader*, Penguin.
- 豊崎 光一 1975 『砂の顔』, 小沢書店。

(おおた しょういち)